



## 日本舞踊家 梅川壱ノ介 様

<https://www.umekawaichinosuke.jp/>



新進気鋭の日本舞踊家として、今注目の梅川壱ノ介さん。

昨年からリニューアルされた、JAL(日本航空)の降機ビデオでも、夕日を背景に「美しく舞う姿」が披露され話題になっています。

実はそんな壱ノ介さんですが、大学卒業後に入団したのは、クラシックバレエの名門「東京バレエ団」なのだと。バレエダンサー、そして歌舞伎俳優と次々と華やかな世界を歩むなか、日本舞踊家としての道を選んだのは、現在の師匠である人間国宝 坂東玉三郎さんとの出会いにあったとお話しになります。

### 「自分のアイデンティとは何か」 洋の世界から和の世界への転身

►幼少期はミュージカル俳優に憧れていたそうですね。

幼い頃は日本のことに対する興味がもてなくて、逆に西洋のものに憧れていました。幼稚園のころからクラシック音楽を聴くのが好きで、中学3年のときに劇団四季のミュージカルを観たのがきっかけで「こんなすごい世界があるんだ」と、ミュージカルの世界に行きたいと思っていました。

そこからまず声楽を習い始め、大学に入ってからはバレエも始めました。実はミュージカルのために始めたバレエでしたが、先生から「あなたはバレエの体に向いているから本気でやった方がいい」と言われ、そこからバレエに打ち込むようになりました。

►その後、クラシックバレエの名門「東京バレエ団」に入団されるのですね。

ちょうど入団して2年後に海外ツアーがあったのですが、そこで衝撃を受けました。バレエはこのあたり(西洋)で生まれた文化なのだと痛感したのです。街並み、食べ物、人、音楽、石畳の街並みと、そこに流れるもの全てがバレエに精通していると…。そう考えると、では「自分のアイデンティは何なのだろう」と思ったわけです。日本人なのに、自分は日本のことを見知らぬまま西洋のものに憧れてきたことに気づきました。「ではどうすれば」と考えるうち、「日本文化で古典で華やかで」と、そのとき自分なりに出した結論が歌舞伎でした。ちょうど国立劇場歌舞伎俳優養成所の3年に一度の募集がその時期にあり、志願をしたら合格することができました。

### 運命を変えた玉三郎さんとの出会い 舞踊家「梅川壱ノ介」としてスタート

►西欧のバレエから、日本の歌舞伎俳優への転身。大変ではなかったですか。

バレエと歌舞伎では体の使い方が全然違いますし、別物として考えた方がいいですね。

表現という意味では、どちらも言葉を使わない身体表現なので、似ている部分はあると思いますが、「体の使い方、腰の入れ方、足の出し方」すべてが違います。そこで苦労した部分はあります。

歌舞伎の世界に入って1年目。思っていたのと違い、辞めようかと思うこともあったのですが、2年目に、今の師匠である坂東玉三郎先生との出会いがありました。「日本にこんなすごい人がいる」と衝撃を受け、そこから日本舞踊を教えて頂くようになりました。

►徐々に歌舞伎俳優から日本舞踊へと気持ちが傾いていくのですね。玉三郎さんには相談されましたか。

直接ご相談しました。歌舞伎のなかには、「お芝居と踊り」があり、私が好きだったのが日本舞踊でした。ただ、実際に歌舞伎の舞台に立つときにはなかなか踊る機会がなく、自分が本当に好きなものができないことへの悔しさ、葛藤みたいなものがあったのです。

「踊りの世界でやっていきたい」という気持ちを伝えると、「だったら歌舞伎の世界を離れ、日本舞踊をした方がよい。応援するから」と言って頂き、10年前に歌舞伎俳優から舞踊家「梅川壱ノ介」としてスタートさせて頂きました。玉三郎先生には今でも師匠としてご指導頂き、年間2か月位はトークショーの聞き手役として、全国ツアーと一緒にまわらせて頂いています。

## 日本舞踊の可能性を拓げていきたい

►舞踊劇「御伽ノ介絵巻 桃太郎」が全国で上演中で、好評ですね。なぜ桃太郎を選ばれたのですか。

なぜ「桃太郎」かというと、一番好きな昔話で「自分が桃太郎になりたい」と思ったのが一番の理由です。「絵本と日本舞踊のコラボ」にすれば、子供たちに観てもらえるのではないかと思いました。また、海外に持つていけるものにしたいという気持ちもありましたね。

一般的な日本舞踊とは違う、楽しいしあげが満載でしたね。

この舞台に関してはミュージカル調にして、生演奏(ヴァイオリンとピアノ)で躍動感をつけました。ミュージカル調ですが、大道具や衣装はすべて歌舞伎の演出です。歌舞伎や日本の文化をしっかり残しながら、観ている舞台は新しい、何かカッコいいと思ってもらえたらしいなと思っています。落語の漸家さんに語りを入れてもらっているので、よりわかりやすいと思います。

幼い頃の経験で、日本舞踊や日本の文化はつまらない、面白くないし眠くなる、といった印象がありました。それが玉三郎先生との出会いで徹底的に壊されたのです。日本文化を勘違いしていました。だったら、自分に今できることは、「日本舞踊は、カッコいいし、深堀りすれば色々な学びがある」「こんなにいいものはない」ことを知ってもらいたいと思ったのです。

特に子供たちに知ってもらいたいと思っています。

►舞台の所作が美しいなあと思って拝見していました。何か秘訣があったら教えてください。

それは「間」だと思います。「すぐにパッと」動き出すのではなく、「ひと呼吸」おいて何かするのです。この「間」というのは、日本舞踊や今回の舞台でも実は沢山詰まっていた要素です。単に時間的な間というだけでなく、その間がお客様との特別な時間になったり、自分を落ち着かせ、思考を安定させて、整理するための時間になったりします。

あとは「目線」です。「今、自分の目にはどんな景色が映っているのか、何を思ってここにいるのか」という「立ち位置」をしっかり理解していることです。そうすることで「言葉や動き、所作、思考」が変わります。

玉三郎先生と全国をまわっているとき、手紙の話になったことがあります。今はLINE(ライン)が便利ですが、手紙は出しても相手に届くまでに時間がかかり、また戻ってくるにも時間がかかります。その間は思いがずっとつながっていると思うのです。今は色々なものが簡略化されて便利ですが、色々な意味で浅くなっていると感じています。その逆をいくのが古典だと思います。所作の一つのお辞儀をする時にでも、相手さまを見て一回落ち着いて、目を見てお辞儀をする。そういう「間」の取り方は人とのつながり、関わりを大切にすることでもあります。

►壱ノ介さんが毎日ルーティンにしていることはありますか。

寝る前に、次の日にどんなことをするかTODOリストみたいのを作って、朝起きたら珈琲をゆっくり点てながら、心落ち着ける時間をゆっくり過ごしています。毎朝ですから珈琲の香りや味が少し違っていると感じことがあります。「今日は気分がいいな」とか自分と会話しながら、今日やることを想像して一日が始まります。そんな朝の時間をとても大切にしています。

►最後にこれから抱負を教えてください。

玉三郎先生のもとで芸道を修業しながら、日本の先人が大切にしてきたことや日本文化の素晴らしさを子供たち、日本の人たちや世界中の人たちに届けたいです。日本舞踊を通して、世界中の人たちと心を通わせ親交を深められる存在になりたいと思っています。



インタビューを終えて

岡山で開催された舞台の後、楽屋でお話しを伺うことが出来ました。今までみたことのないような楽しくカッコいい舞台。「伝統と革新」という言葉がピッタリですが、しっかりと古典に裏打ちされているからこそその圧巻の舞台でした。 (写真は桃太郎に扮した壱ノ介さん)

